

彼岸と此岸

この世界の生活に思い悩み
苦しんでいるとき

ひょいと自分の中心を

彼岸にいる自分とすり変える

見える角度が三百六十度

以上にも広がり

展開するのだから

痛快だ

かつての自分の愚かしい

ことも見えてくる替わりに

何も思い悩むことなど

ないことだって見えてくる

彼岸と此岸

どちらが本拠地であるのか

わからないが

一瞬の間に星さえ飛び越えて

しまふ彼岸が

此岸より劣っている

とは思うまい

カプセルの中に埋もれているに

等しいという此岸

此岸も彼岸も

今は今に違いなく

此岸でやるべきことは

たんとあるのだから

彼岸の自分に頼ることは

今はまだ愚かしい

笑ったり泣いたり
怒ったり恨んだり
我を貫いてみたりするの
も
此岸の特権なのだから
おおいにやればいい

ナガサキ今

六十五年前の夏

この地の上空で

二発目の火球が炸裂した

その瞬間に

ヒトは溶け

ヒトは焼け焦げ

ヒトは異形のものとなった

放射能という

全てを焼き尽くし

全てを突き抜け

全てを狂わせてしまう

宇宙の始原の内に潜んでいた

異端児が

子供の上に

母の上に

少女たちの上に

老人たちの上に

若い兵隊たちの上に

情容赦なくのしかかり

灼熱の閃光を浴びせた

イヌやネコやウマや

学校や工場や鉄塔や

石組や塑像や瓦や線路や

そんな形あるものを

破壊し尽くすばかりではなく

心の芯までを引き裂き

阿鼻叫喚の

真空地帯に

変えてしまった

六十五年を経て今

ナガサキの坂道には

マップを片手に

アベックや

修学旅行生や

外人たちが

上ったり下ったり

笑い合ったりする

しかし

宇宙の始原の内に潜んでいた

異端児が

そう簡単に遁走したとは

とても思えない

天を指さし

左手を水平に広げ

平和を祈念する像が立ち

溢れるほどの噴水が上がる街の

片隅に

もしかしてまだ

かの異端児がひっそりと

潜り込んでいないとは

限らない

亜熱帯化

南の国の植物が育つんですよ
店先での立ち話だ

名前はなんだったか
確かに南国の植物らしい
木肌が柔らかくて伸びやすく
葉もてっぺんに大きく開いて
いかにもおおらかな風情だ

北限だとかの難しい
ことはわからないけれど
種をカウンターの水に
浸けていたら
ぐんぐん伸び出したという

子供の頃からすれば

二、三度は上がってますよ
三十五度を超えるなんて
昔はなかったですからねえ

店の婦人は汗を拭き拭き
馴染み客との立ち話に
余念がない

気温も変だし
スクールまがいの雨が降る
稲妻の走りも激しい
おまけに電気事情が悪いので
空調温度を高く設定しているのも
一因でしょうけどねえ

婦人たちの立ち話は

尽きないが

亜熱帯化しているというのは
的を射ているかもしれない

両極の氷が溶け

何度も何度も

地が揺れ動いたりしていると

地軸が妙な具合に

傾き始めていたりしても

おかしくないのかもしれない

風に吹かれて

都府楼跡の礎石に腰をかけ

指の丈ほどに伸びた原っぱの草が

風に吹かれるさまを眺める

薄緑色の草は細い糸に似て

湿った西風が吹きかけると

サワサワサササとこぞって東に靡く

夕方七時を過ぎ

無人の原っぱはがらんどくに広い

雲を低く走らせ

サクラやモミジの木々を翻らせ

西風はなにゆえか

微かな憂いを携えていて

原っぱの草群に寄りすぎるかの体に

吹きかけている

いま悲しくはないかい

どこまで行くの

あの山を越えてもう一つ山を越え

行きつ放しなの

今度東から西に向け

雲が流れ始めるときまではね

暮れ落ちていくなか

礎石に腰を降ろしていると

西風のことばも草のことばも

手にとるほどに聞こえ

湿った西風が抱え込んでいるらしい

憂いのさまも

指の丈ほどに伸びた草たちの

けなげなさまも

千年の雨風に打たれ
鋭敏に研ぎ澄まされた
礎石の魂の震えを通して
なんでも
聞くことができる

初夏そよぐ

午後七時を過ぎても明るい
観世音寺から戒壇院を回り
裏道を歩く

西日が正面にあり
まぶしさに帽子の庇を下げ
肌に心地よい風を浴び
都府楼跡へと向かう

菖蒲は花を終え
紫陽花も主役の座を
降りたばかりだけれど
庭の隅にシヤラの花が
ひっそりと白い顔を見せ
石垣の中頃に
ドクダミの群生が
あつたりする

ゆつくりと光る風に
向かい歩みゆくと
公民館のあたりが騒がしく
光が窓ガラスに揺れ
ドアが何度も開かれては
閉ざされる

側溝を流れる水が澄んでいて
小さな音を奏でながら
かなりの早さで流れ
水草を楽しませる
都府楼跡の原っぱには
まるで人の姿はなく
伽藍跡を四王寺方面に向かい
歩けば

折からの風になぶられ
トウカエデの繁りが
いい気持だよと
鳴るばかり

魂魄

私は魂であった

魂と呼ばれるものであった

雨が降り続いていった

雨は嵐に変わっていった

蛇を怖れている

蛇の纏れ合っている姿が怖い

それでも蛇を見たかった

とぐろを巻き

威嚇してくる蛇の

あの脂ぎるほどにぬめった

肌を感じたかった

夜明け前であった

雨は霧雨となって

空に向けて降っていた

確かなものなどない

確かなものなどない

と宙に留まった私の魂は

そう叫ぶ声を聞いていた

狂おしいほどに

のたくり蠢く蛇の様を

眼下に見ながら

生まれたままの姿で

男と女があられもなく

纏れ合いまさぐり合っている

のだと知っていた

夜明け前であった

雨は靄となって

空に向けて雪崩れていた

確かなものなどない
確かなものなどないのだ
と宙に留まった私の魂は
いま放出された精液に射抜かれ
しとど濡れていた

自由無碍

宙空間を自在に飛んでいた

という記憶がある

時間の隔たりも

こちらから向こうへの

障壁もなく

自由自在に飛んでいた

夢であるのか

現のことであるのか

どう考えても現のことと

しか思えない

つい昨日のことであり

いや明後日あたりのこと

である筈で

昨日と明後日が

どちらが先で

どちらが後のことかも

こんがらがってしまっただが

どこにでも行けるし

どこからでも現れることが

できた

飛んでいるときは

飛んでいることが当たり前で

あったから

今、飛行機などという

不自由きわまりない

奇天烈な檻に閉じこめられ

飛ばねばならないとは
文明も落ちたものだ

と嘆息して

我に返ったものだ

我に返る間際のこと

もう一つある

会いたい人や

会いたいことや

会いたい自分に

願ったときには会っていた

不平のままを言っている

今の自分にも

宙の彼方の星雲のあたりに

漂っていたときの自分にも

フィヨルドに生えた

一面の苔の下に住んでいたときの
自分にも
いつでも会っていた

言わざる

見ざる、言わざる、聞かざる
とはよく言ったもので
特に、言わざるというのは
金言の類だ

ことばを巧みに操り
恋も、出世も、商談も
果たすのが習いであるが

言えばあたりの空気を乱し
神経まで刺してしまうという
輩がいる

というのはほかならぬ
自分もその一味で
たわいのないことを言った

つもりが
相手の肝を握りつぶすという
ことになってしまいうらい

普段ものなど言わぬ奴が
言わぬくせに
言えぬくせに

ズドンと腹にめり込む
類のことを言うなどとは
無礼千万
お門違いもはなはだしい

などとなるからややこしい
冗談のつもりが冗談ではない
となると悲惨だ

言わざるを決め込む

言わざるのポーズをとる

言わざるをいいことに

四方から八方から

礫となつて言葉が飛んでくる

言葉がチクチクと

ぶんぶんと飛び交う

言わざるのポーズの主は

聞いても見えず

見えても聞こえない

石ころになる高等な術を

よくよく

心得おく必要がある

あめんぼう

なさねばならないことが重なる
あせつてしま

一つに嘴を入れ

違うやつにも嘴を入れ

何もかもに嘴を入れ

前後見境なくスタートするのは
いいとして

一週間が経っても

何一つ片付いていないことに

はたと気付く

どれもこれも期日が切迫して
いるから

あめんぼうを真似てくるくる回り

気持だけは激しく急くのだが
よけいに混乱してしまう

一つ一つということは知っている

一つを片付け

次にまた一つという具合だ

わかってはいるけれど

期日は待ってくれない

あめんぼうの仲間を呼んで

くるくるくるくる

くるくるくるくる回る

二週間が経っても

何一つ片付いていないことに

気付き凍り付く

今更一つ一つもないだらうかと

悲痛な叫び声をあげ

もう一匹のあめんぼうまで呼び寄せ

くくくくくくくく

くくくくくくくく回してぐる

無有恐怖

心をおおう煩悩が消えると
無有恐怖になると
般若心経にうたわれている

煩悩という

そのものからして

よくわからないのであるが

煩悩に満ち溢れた日々を

送っているであろうことは

十分承知だ

煩悩を消す

煩悩に囚われない

そう考えると

気が遠くなりそうで

途端にしゃがみ込んで
しまう

雪が降っている

綺麗だな

と感じるのも煩悩の

仕業だろうか

田舎から餅が届いた

気をかけてもらって

ありがとう

というのも煩悩の

仕業だろうか

てやんでえ

俺の仕事のどこが

まずいんだ

感覚の違い、方法の違い
に過ぎないだろう

という手合いは

もうまさに煩惱の仕業
であろうと思われる

がどうあれ

日々無有恐怖にならない
ところをみると

自分のありとあらゆる

ところが

煩惱の海にどっぷり浸り

暮らしていると

いうのだろう

朝刊

ラッシュアワーの電車が止まると
駅の改札口に向けて殺到したのは
刷り上がったばかりの
朝刊たちだった

それらのどれもが
人類滅亡迫る
という危機的なスクープを
得意満面に一面トップに
掲げていた

改札口では
駅員たちが何のためらいもなく
アトムやドラえもんたちの手から
切符を受け取った

反作用

ねばならない

ねばならないと

言われ続けると

そしりの言葉の

エネルギーは

大きすぎるから

ねばならないの

反対方向に

ベクトルを

向けてしまうことになる

引つ張ろうと考え

引つ張ろうと

すればするほど

反する力

つまり反作用の力が発生し

正比例して

強くなるから

正比例してとてつもなく

強くなるから

反作用のことを

よく知る人は

黙って

ただ抱きしめてやる

それだけが

それこそが

なすべきことの全てなのだ

めまい

わたしは

あおぎめたとおい

宇宙を知っている

わたしは

めくるめくしらしらした

星たちのゆらめきを

知っている

あおぎめたとおい

宇宙は

実は

わたしたちの内にあり

いとも簡単に

手の届くところにあるのだ

ということ

知っている

わたしは

実は

星たちのゆらめきは

わたしたちの胸の内や

わたしたちの三半規管の奥や

わたしたちの目の玉の上に

シャボン玉のかたち

に浮いている

のだということ

知っている